

第二話

第一項「わが教団は、自利利他の願輪を廻らして、
ほんとうの人生を味わいつつ、世界楽土を
建設するのを目的とする。」

立教の主旨の第一項に、教団の目的が掲げられております。

元来、禅門の慣習では、伝法を宗旨の基本に据え、それをすべてに先立って第一に掲げるのを原則としております。

ところが人間禅の『立教の主旨』では、伝法については第一項に掲げず第二項に下げ、替わって、伝法に関わらない教団の目的・目標としての「世界楽土の建設」を掲げております。

これは「伝法のための伝法」ではなく、「布教のための伝法」であることを立教の主旨の最初に明確にし、宣言しているのがあります。

両忘協会の『立教主旨』は、第一条に「本協会は、釈迦牟尼佛を教主となし、達磨大師を宗祖とし、転迷開悟を以て教旨となし、実参実証を以て法則となす」を掲げられておりますが、わが教団の『立教の主旨』では、これと同じ主旨は第二の条項に下げられ、その前に人間形成にもとづく世界楽土の建設という立教の主旨の目的が謳われているのであります。

すなわちこの一段では、従来の禅宗僧堂・教団のあり方について極めて大きな方針転換を打ち出していることになり、人間禅教団のありようについての基本方針を明確にしているのであります。

教団の目的は、教団が栄えることでも、教団が永続することでもなく、この地球に世界楽土を建立するという、本来の宗教にと

っては当然のことであり、当たり前すぎる、しかしだから、極めて崇高な目標が掲げられているのであります。

言い換えますと、世界楽土建設のために（全ての人を一人残らず救済するために）、教団を立ち上げ、立教するというのであります。

そして更にこの一項においては、「仏教の、臨済宗の、居士禅の」というような宗派性を全く出していない点も注目しなければならない点であります。

すなわち、キリスト教でも、イスラム教でも、どのような宗教宗派もこの第一項は、それぞれの宗教宗派の立教の主旨の第一項として受け入れることができ、採用できる内容の項目になっているのであります。（本当にこれが採用されれば、すなわち立教の目的から個別の宗派性を抜き、汎用性のある宗教本来の救済目的（世界楽土の建設とか、戦争のない平和な社会の建設等）に絞り込んで頂ければ、地球上から戦争をはじめとした宗教原因の諍いは絶滅すると考えられます。）

教団の目的として、地球的、人類的目的・目標を最初に掲げている点は、極めて大胆且つ特徴的であるといえます。歴史上のあらゆる宗教宗派を見渡しても無しとはしませんが、傑出していると考えられます。

この一段の構成は、「自利利他の願輪を廻らして、ほんとうの人生を味わいつつ、世界楽土を建設するのを目的とする。」となっております。

「ほんとうの人生を味わいつつ」というものは、また後から耕雲庵老師の言葉を引用しますが、これは自利であり、「世界楽土を建設するのを目的とする」というのは利他であります。

磨甄庵老師は、「「ほんとうの人生を味わう」ということと、「世界楽土を建設する」ということとは、不二一如である。前者を欠いては後者が成り立たず、また後者を志向せずして、前者も

ありえない。」と示されておられ、まことにその通りであります。

（しかし現実には、地球上の宗教に関わっている多くの人達の何割の人が、ここを明確に腹に入れられているでしょうか？）

そしてこの自利と利他の前に「自利利他の願輪を廻らせて」とありますから、この自利は「ほんとうの人生を味わいつつ」であり、利他は「世界楽土を建設するのを目的とする」が該当し、これを廻らせるというように解釈すべきと考えます。

まず、「自利利他の願輪を廻らして」ということは、「衆生無辺誓願度、煩惱無尽誓願断、法門無量誓願学、仏道無上誓願成」という仏の「四弘誓願」と同じねらいではありますが、『四弘誓願』文には仏教という宗派性が入っておりますが、この『立教の主旨』の一項には、仏教という宗派性を洗い落として、全ての「ほんとうの宗教」に、共通する願いの表現になっております。

「願輪を廻らす」という言葉にも深い意味があり、「四弘誓願」を見れば判るように、利他の項が先に掲げられ、二項以降に自利の項が続いております。そして、衆生無辺誓願度から始まって仏道無上誓願成までゆくとまた始めに戻って、度すべき衆生が



第三世総裁 磨甄庵劫石老師

居なくなるまで、四弘誓願は廻ってゆくという意味であります。したがって、この立教の主旨における「願輪を廻らす」と云うことも、世界楽土が完結するまで、この自利利他の願行は止まることなく、繰り返されると云うことであります。一人の迷える人も悩める人もいなくなるまでが、完結するに関わっているのです。

そこで、「ほんとうの人生を味わいつつ」であります。この意味も色々な深い意味が含まれています。

先ず耕雲庵老師は「ほんとうの人生を味わいつつ」について、上求菩提下化衆生の前半分の上求菩提であるが、平たく云って「真剣に生きること」である。とされています。

そしてまた「人生を楽しむ」というのではなく「人生を味わう」と言われ、「楽しむもよし、喜ぶもよし、悲しむもよし、そんなことにかかわらず、自らを欺かず自らに納得がいただけるなら、その一つ一つが――楽しむこと自体が、悲しむこと自体が、真実に生きることであり、真剣に生きることであり、これがほんとうの人生である。」と申されておられます。耕雲庵老師のこの暖かい慈愛が、宗教家臭さのないほんとうの宗教の有り様を覗わせるものであります。

そしてこの「ほんとうの人生を味わいつつ」の自利のこの句が、最後の目的である「世界楽土の建設」にかかっているのです。ここに、わが教団・耕雲庵老師のものの考え方が明確に示されているのであります。

自分が味わっておいしさを噛みしめたら、他の人にも味わわせたいと思うのが、人間の自然としてあるとの認識が基底にあり、教団では、自利利他も、宗教的救済もこの考え方に基づいております。すなわち先ずしっかり、自分でおいしさを味わうこと、これが希薄で、自分がしっかり味わうこと無しに、人に食べることを勧める愚を決して我々は取らないのであります。更なる深読み

として、「味わいつつ」の「つつ」の意味を噛みしめる必要があります。この「つつ」は意味深長であります。世界楽土建設という目的に、自己犠牲があってはならないし、そんなものでは長続きしないし、到底世界楽土建設にはならないのであります。目標としての「世界楽土建設」に向かって進む当人の個としての人生は、しっかりと味わい得る確信を持っているのであります

また更に、自利が終わってから利他になるとの見解も結構多数の意見としてありますが、私はそうは思いません。一日一炷香で、一寸坐れば一寸の仏といいますが、一寸坐れば一寸の味わいが判り、そこに一寸の利他行が生ずるといふものであると考えております。したがって、ほんとうの人生を段々と深く味わうようになるに連れて、利他の世界楽土建設にも更に大きな力を注ぐことが出来るようになる、寄与したくなる、ということです。すなわち「ほんとうの人生を味わいつつ」には、自分の境涯が低きから高くへと進展しつつ、という意味も含まれていると解釈できると考えます。ほんとうの人生を深く味わえば味わうほど、世界楽土建設へ向かって行くドライビングフォースが自然に大きくなるというものであります。しっかりとこの妙味を噛みしめることができれば、自然に無縁の慈悲のほとばしりで、気負いもなく、疲れも知らず担雪填井を繰り返し繰り返し繰り返しできるのであります。

利他行は、古参で境涯が高い方々の方が、若い人・修行歴の浅い人より、大きく進むと考える人がいると思いますが、私は必ずしもそうは思いません。利他行の力は、老若男女を問わず、修行の長短を問わず、自分が純粹に打ち込んで骨を折って味わっている感激の大きさに比例するものであります。その新鮮な感動は、年齢でも修行の年数でもないわけであります。

磨顛庵老師が常々云われていたことでありますが、「己をむなしくして、赤誠を投じて真剣に骨折るから、心の底から「忝ない」という熱い法恩の気持ちがあき起こり、それが利他のエネルギー

ギーになるのである。」「利他行ができていないものは、こういう修行になっていないからである。」と。自分の感動が小さくは、人様に感動を与えることは出来ないというものであります。深く感動し、その感動がさめないということは、熱い真剣な打ち込みが持続しているということであり、修行の真贋が問われるところでもあります。

最後の世界楽土の建設について、耕雲庵老師は、「世界楽土」について、正しく・楽しく・仲よく棲み得る世界が楽土であり、この正しく・楽しく・仲よくの三つを実現する行程が世界楽土の建設過程であるとされています。

磨甄庵老師は、更に深く娑婆則寂光浄土と深く掘り下げられた「世界楽土」の見方をされておられます。

そして耕雲庵老師は、民族・宗派を問わずに、世界の人々に等しく呼びかける意味を込めるために、教団の目的として「世界楽土の建設」と謳っているのもその理由を述べられています。これはやはり、第二次世界大戦直後の歴史的背景（日本人としての反省）もあってのものと考えられますが、更に21世紀においては、人類のみならず地球上の全ての生き物の共存と持続がこの世界楽土には含まれていると解釈したいと私は考えます。

最後に、もう一度繰り返しますが、立教の主旨のこの最初の一段は、わが教団は、決してたんなるセクトの集団目的を掲げて立教していないんだということを、しっかり腹に入れて頂きたいと思えます。世界のどの宗教ともこの最初の項は、それがほんとうの宗教で在れば、必ず共有できる誓願であると確信しているのです。

今日の世界の課題の核心に触れる人類と宗教の共通誓願を、わが教団・耕雲庵老師は、第二次世界大戦終結直後の日本が物理的にも精神的にも廃墟となった最中（昭和24年3月3日、60年

前)に、将来を見据えた指針を明確に打ち出されていたわけであり、まさに、耕雲庵老大師の「視野の世界性」の面目躍如たるこの項を、しっかりと受け止め、こういう立教の主旨をわが教団は持っていることを誇りにして頂きたいと思ひますし、吾がものとして頂きたいと思ひます。

二段目以降は、この最初の目的を達成するための手段と各論であると私は考えております。同じ主旨のことを、宗門無尽灯論において、東嶺禪師が明快に述べられておられます。すなわち、『四弘誓願』においては、最初の「衆生無辺誓願度」が柱であり、主要目的であり、二段目以降の「煩惱無尽誓願断、法門無量誓願学、仏道無上誓願成」は最初の一段の「衆生無辺誓願度」のためにあるのだと述べられておられます。

「わが教団は、自利利他の願輪を廻らして、ほんとうの人生を味わいつつ、世界楽土を建設するのを目的とする。」

本日はここまで。